

# 卷頭言

## 保育実践の質の向上のために

### — 実践記録に学ぶ —

勅使千鶴

いま、幼稚園や保育所、保育関係学会で、「保育の質」を向上させることが理論と実践の研究課題となっています。この動きはすでに一九九〇年代から欧米を中心進められています。当初は保育条件の改善のための数量的な研究で、その後、保育実践の質の向上の追究に焦点が移りました。

一九九五年八月、横浜で開催されたO<sup>オ</sup>M<sup>エ</sup>E<sup>イ</sup>P（世界幼児教育・保育機構）世界大会のシンポジウムで、「保育の質とカリキュラム」が討議され、日本でも保育内容の質の向上に関心が向けられるようになりました。二〇一〇年六月には、第十三回O E C D（経済協力開発機構）セミナーが東京で開催され、「保育者の専門性と園組織運営の質の向上」が討議されました。二十三か国から二百名ほどの参加がありました。



二〇〇九年四月、新幼稚園教育要領・保育所保育指針が施行され、幼稚園・保育所で保育の「質の向上」のために、「保育の振り返り」として「自己評価」の取り組みが、各地、各園で始められています。

たとえば、これまでの保育界にある「させる保育」の流れを変え、「子どもの心を育てる保育」の流れをつくり出すことを目的とし、実践を振り返る「エピソード記述」を導入した方法があります（鯨岡峻・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房、二〇〇九年）。この「エピソード記述」は、一人ひとりの子どもを見て、子どもの気持ちに共感し、自分自身の行動についての振り返りがあり、大切な取り組みであることに気づかされます。

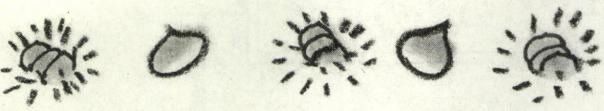
特に、学生に一人ひとりの子どもの様子を把握させるため、ビデオを使用して、けんか、給食、あそびなど日常よく見られる三分ほどの場面を書き取るよう指導している筆者には、「エピソード記述」は興味のある手法です。ちなみに筆者は学生に、ちょうど演劇で使用する脚本のように書くことを課しています。この活動が、保育学生の子どもを見る目を形成させる第一歩となり、保育職に就いてからの「エピソード記述」の活動につながることを期待しているからです。その上で、筆者は、保育者の「保育実践の質」を向上させる視座から、「エ

ピソード記述」の次の段階に進むことがいま求められていると考えています。

それは、まず、保育者自身が「保育は楽しい」と実感できることです。さらに、「子どもを真ん中におき、同僚と共に子どもを信頼し、子どもの発達を確信した時の喜び」、「子どもと保育者との共同作業の緊張感」を体感できることです。それらのことがわかると共に、さらに質の高い保育実践を展開させるための一つの方法として、先達の保育実践とその記録に学ぶという提案をしたいと思います。

すでに、日本には戦前から優れた実践とそれらを記録した雑誌『幼児の教育』や『保育問題研究』の復刻版（白石書店）があり、ここから学ぶことができます。文字だけでなく16ミリフィルムに残された「ある保母の記録」もあります。これは戦前の「保育問題研究会」のモデル実験保育所として建てられた戸越保育所の記録です。このフィルムは保育内容・方法の実際と共に、後に日本保育学会会長になられた山下俊郎氏が親に講義をし、保育者との共同研究をしている様子を見ることができます。また、親が作っている「母親新聞」の様子も記録され、今日の保育活動の原点を見る思いがします。この記録は、一九八〇年





六月二十五日、N H K 教育番組で「昭和回顧 ある保育所の記録」として放映されました。

戦後になり、多くの貴重な実践記録が出されました。戦前の「保育問題研究会」で保育者と共に共同研究を進めた三木安正氏の編著『年間保育計画』（フレーベル館）が一九五九年に出版されました。同書は、多くの保育者に長い期間、実践を考える際の「バイブル」として読み継がれていました。

保育者の書いた実践記録として、生活綴り方の教育実践から学んだ岸和子著『幼児時代』（麦書房 一九五七年）があります。これは、一人ひとりの子どもと共に感し、保育者の子どもたちへの願いが書かれ、今日もなお学ぶことが多いります。その後、単行本や雑誌などに掲載された実践記録は多く出されています。宍戸健夫ほか編集『保育実践のまなざし 戦後保育実践記録の六〇年』（かもがわ出版 二〇一〇年）は、単行本の実践記録を手際よく紹介しています。

多くの実践記録を読み、職場や学校で討論し、その成果を自分の実践に活かし、そのことが保育や「保育実践の質の向上」につなげることができたら、と保育者や保育学生に期待するこのごろです。

（日本福祉大学特任教授）